

本発表の目的は、どのようにウラジミール・ジャンケレヴィッチ(1903-85)が、『第一哲学 - 《ほとんど》の哲学への導入-』(1954)で、瞬間を語ることの可能性を論じたかを明らかにすることである。彼によれば、意識の本質は、何かを指定することではなくて存在である。それゆえ、意識があるということは、対象が存在することではない。ひとつひとつの瞬間の存在なのである。また、存在は存在者の総体ではない。彼が言うように、主観の意識と客観の存在の対立があるのではない。主観の意識-存在と存在者の対立がある。それゆえ、意識は、存在者の世界に還元できない。ジャンケレヴィッチにとって、意識と存在者の差異は、意識の瞬間性に存するのである。語るの意味もこの瞬間性にある。したがって、語りが存在者への無限後退に至ることは、彼の意図ではない。

まず、彼が先行するアンリ・ベルクソン(1859-1941)から何を学んだかを明らかにする。ジャンケレヴィッチによれば、ベルクソンの持続が純粹であるのは、それが均質で等質であるからではない。なぜなら、ひとつひとつの多様な瞬間の連続が持続だからである。また、持続は空間ではないので、この瞬間が現在であるとかあの瞬間が過去であるとは言えない。瞬間の堆積が過去であり、瞬間と瞬間のあいだが現在である。瞬間がなければ、持続はない。ジャンケレヴィッチは、これに瞬間の持続に対する存在論的優位を見出す。

次に、瞬間の意味について論じる。それは、瞬間の自己目的である。瞬間は、前の瞬間も後の瞬間も前提しない。瞬間は無から生じ再び無になる。それゆえ、なぜこの瞬間が生じるかは偶然である。では、どのように瞬間を語るができるのか。ジャンケレヴィッチによれば、瞬間は「それ自身」としか語りようがない。なぜなら、何かをそれとは別なものに喩える「アレゴリー」によっては、「それ自身」を語ることにならないからである。したがって、どこまでも瞬間を語ろうとするならば、瞬間は、「アレゴリーの《他》」ではなくて「アレゴリーの絶対-他」で語られなければならない。それゆえ、瞬間を語るとは、瞬間の「それ自身」が語り得ないものであると語ることなのである。

そして、瞬間の「それ自身」とは、「自己自身」であることを述べる。「自己自身」とは何か。彼によれば、「自己自身」とは、自己の見かけと存在の一致である。ジャンケレヴィッチは、客体の「フランス」の自己性と主体の「人間の自己性」を例に論じる。客体の「フランス」の場合、自己の見かけとは、「地形の情報」、「自然の情報」、「気候の情報」などである。しかし、それらを集めても、「フランス」にはならない。「私」は、そうした情報を総合することで「フランス」に到達できる。主体の「人間の自己性」の場合、自己の見かけとは、「文体」や「服装」などである。なるほど、情報と違って、こうした自己の見かけも「自己自身」を表現していると言えよう。しかし、それは、見かけである限り、「自己自身」の「全体」ではない。いかにして「私」は、自己の見かけと存在は一致できるのか。それは、自己自身を語るのではなく、自己自身を生きることによってである。

以上より、瞬間を語ることから瞬間を生きることへの転換が明らかになるのではないか。「私」は、瞬間において自分に対しても他人に対しても隠し事はできない。瞬間の生は、道徳的生に結び付くのではないか。